

財団だより

# 多摩川

1995. 9 第67号



ボラ（ボラ科）  
幼期に川を遡る。下流から内湾に住む。



## ■多摩川現風景■

### (23) 川と地域を結ぶ交流ボート進水式

7月30日午後、丸子橋下左岸でEボートと称するオリジナルドラゴンボートのお披露目と進水式が行われた。

このボートは、川やダムで競技会などを行い、上下流交流や地域交流を推進しようと地域交流センター（東京都西新橋）内に設置された交流ボート大会実行準備会が開発し、全国の自治体、企業、団体に呼びかけ各地で交流競技大会を行おうと計画している。そのさきがけとして、多摩川で全国最初のお披露目が行われた。EボートのEは、Exchange, Ecology, Eco-life, Environmentなどの意味を持っているそうだ。

この日は、100名程の人たちが集まって、進水式の後、模範競技が催された。

多摩川を選んだ理由は、多くの人が集まる場所であり、アピール性が高いからとの事で、その後

丸子橋下左岸で行われたEボート進水式（'95. 7. 30）

ただちに四国の肱川に運ばれ競技会が催されるとの事であった。多摩川でデビューしたこのボートが全国に広まって、いい川づくり、まちづくりの仲介者となれば幸いである。

### ●関連する財団の研究助成

#### <学術研究>

#### ① 多摩川活性化の方途〔水と親しめる町づくり〕

1990年 柴田徳衛 東京経済大学 (No.138)

#### ② 多摩川における河川敷利用の変遷について

1993年 三井嘉都夫 法政大学 (No.159)

#### <一般研究>

#### ① 玉川上水系の用水流域住民の意識調査および

水辺レクリエーションに関する調査 1988年

小坂克信 八王子市立第三小学校 (No.69)

#### ② 多摩川における青少年のあそびと環境教育の

研究 1994年 千葉勝吾 東京都立田園調布

高校 (研究中)

## 多摩川散歩

### ■ 由木みどりのマップ ■

多摩丘陵の自然を守る会 石黒 富江

由木、この響きの美しい地区は、八王子市の東南にあり、市内を流れる浅川右岸沿いの多摩丘陵により市街地から切り離された感じがするところである。1/2以上を多摩ニュータウンに編入されたことにより新住民も多く、隣接する日野、多摩、町田市などとの生活の関わりも濃い。

由木の中央を東西に流れる大栗川を境に南側は谷戸ごとにあった村落が地名だけを残して消え、後には団地群が林立している。今も、進行中である。多摩ニュータウン区域を外れた北側は多摩丘陵自然公園、市街化調整区域、生産緑地が広がり、ひとまず緑が連続している。

その一角にある南陽台に移り住んだ新住民が周辺の雑木林や野草に心を引かれ、会を作り自然観察会を重ねてきた。そのなかで緑地保全区域指定、公園の拡張などの要望、カタクリの移植、トウキョウサンショウウオの生息状況の調査、ホテルなどの水生昆虫が生きられる護岸改修の提案を都・市・公団や地主さんと話し合ってきた。

会結成十周年を記念して、活動報告を冊子「雑木林」にまとめ、又現在の緑の様子をこれ以上減少しないことを願いながら「由木みどりのマップ」として作成した。

自然公園とはいいながら、大規模住宅団地が1/2を占めているが、近郊緑地保全区域、都立長沼、平山城址公園は公有地化されていて開発の心配はない（道路のトンネルによる地下水は心配）。しかし市街化調整区域・生産緑地は将来の予測は明るくない。八王子市は人口47万人を更に60万人台にする基本計画を持つ。緑の町八王子を何色の町にしたいのだろうか。

由木の丘陵に雑木林があり、林の下の谷戸から湧水が流れ、田畑をうるおす。縄文の頃より人間の心をうるおしてきたこの緑を今もなお手をかけ支えている農家の人達が今後も踏んばっていけるよう応援したいと思っている。

「マップ」及び「雑木林」をご希望の方は下記へ御連絡ください。各500円です。

〒192-03 八王子市南陽台3-13-6

石黒 富江

Tel 0426-76-6140



## 私と多摩川



多摩川源流（一ノ瀬渓谷）

'95, 5撮

多摩川源流観察会会長 中村文明

昨年8月に多摩川源流フェスティバルが塩山市の一ノ瀬高橋地区で開催された。このフェスティバルに源流の花々の写真展を企画展示するよう塩山市から依頼され、大菩薩や笠取山周辺の山野草を追い求めていた。山野草を追い求めながらも、何か迫力不足というか、納得のいかない日々が続いた。考えてみると“源流”写真展なのに、源流の写真が一枚も無かったのだ。

正直言って、塩山市民でありながら、多摩川源流の一部が塩山市に存在するという事実を、認識していなかったし、正当な評価さえしていなかった。もちろん、黒川金山が源流にあり、豊かな自然に恵まれていること、それ故この地の歴史的文化的価値を探究しておられる方々もいたが、多摩川の源流という視点からのアプローチはなされて来なかった。

私のはじめて竜喰谷に入谷したのは昨年7月18日の事であった。朝9時にカメラ器材を車にのせローソクで“おにぎり”を買い、国道411号線（青梅街道）を東上し、柳沢峠を越えて、水源林林道を北上する。所要時間40分で目的地に着いた。車を駐車させた所から急な山路を一ノ瀬川渓谷に下り、川を渡渉し対岸を歩く。降りた地点が竜喰

谷と一ノ瀬渓谷の合流点で、東側から流れ込んでくる谷が竜喰谷だった。私を最初に出迎えてくれた滝が“出会い滝”であった。この竜喰谷に入って、水の冷たさ、流れの清らかさ、森の豊かさ、風のさわやかさに目を見張った。自然に足が上流に向く。鋭いV字谷と穏やかな清流。真白な絹の糸を引きながら、苔むした岩や石を縫うようにして流れ下る谷に自分一人が居る。自然の美しさに圧倒されながら、これは本物の川だ。何物にも汚されていない。ありのままの自然だ。自然が完全な姿で、純粋なままで存在している。

この日から、多摩川源流に取り憑かれた日々が始まった。竜喰谷に大小12の滝があること。大常木谷は、女性的なやさしさを一瞬見せてくれるがその正体は人間を拒絶する幽谷であること、大菩薩北尾根を源頭とする泉水谷、後山川の三修谷の森の豊かさは感動のものであること。日原川上流の大雲取谷の険しさは並々ならぬこと。この一年間で80回をこえる源流行を繰り返した自分に呆れ返ってしまうが、それ程多摩川源流はロマンと魅力に富んでいる。少しも飽きさせない何物かが住んでいるということか。

この大自然の雄大さを仲間と共有しようと考え昨年12月7日に多摩川源流観察会を20代30代40代の若者を中心に結成した。1月～2月に塩山中央公民館で“多摩川源流を訪ねて”の写真展（中央公民館主催）を、5月に“多摩川源流体験ツアー”を81名の市民の参加で（これには川崎市や世田谷区などの参加あり）実施できた。

今日、多摩川源流の里・一ノ瀬高橋は急激な人口減と高齢化の渦中にある。この源流の生活と文化、歴史を支えてこられた方々から、あらゆる事を学びたいと願っている。又、多摩川流域の方々との交流と親睦と連帯を図りたいと希望している。私は多摩川源流と出会えた事を幸せに思っている。その源流が塩山にあることを誇りに思う。多摩川源流の景観のすばらしさは流域住民全体の共通の財産であり宝である。私は源流の流れに身を任せながら人生を送れることを夢みている。



## 財団からのお知らせ

### 多摩ルネサンス シンポジウム'95のご案内

— 人と自然の共生、21世紀の都市コミュニティづくり —

多摩川流域の国公立大学から構成されている多摩川流域テクノルネサンス研究協会が毎年行っているシンポジウムも今回をもって12回を迎えた。

第一回が一橋大学で、以後、東京農工大学、東京都立科学技術大学、電気通信大学、東京工業大学、東京都立大学で開催された。本年は東京工業大学で行われる。

多摩川流域の市民・産官学が一堂に会して多摩の新しい方向を模索する絶好の機会である。ぜひ、みなさまのご参加をおすすめしたい。

日時 平成7年11月18日(土) 15:30~17:10

参加費 無料

場所 東京工業大学 大岡山キャンパス  
西2号館 W331教室

申込方法 ハガキに住所、氏名、電話番号、勤務先、勤務先電話番号を明記。(先着順)

主催 多摩ルネサンス シンポジウム'95  
実行委員会

お申込・お問合せ

東京都渋谷区渋谷1-16-14

共催 財団法人 とうきゅう環境浄化財団  
セッションB プログラム

渋谷地下鉄ビル内 とうきゅう環境浄化財団

☎ 03-3400-9142 FAX 03-3400-9141

テーマ 「多摩川流域における  
環境保全と回復」

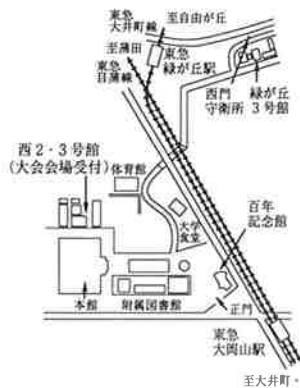
座長 芳村重徳 (とうきゅう環境浄化財団)

講演 多摩川流域の水辺植生とその分布特性  
星野義延 (東京農工大学)

多摩川にふたたびメダカを  
磯村康博 (横浜市水道局)

野川における水循環  
土屋十圀 (東京都建設局)

コメンテーター  
福嶋 司 (東京農工大学)



東京工業大学大岡山キャンパス  
案内図

#### 寄贈文献の紹介

##### ● 「川のしんぶん」復刻版上・下

編集・発行 多摩川の自然を守る会 1995年  
同会が月一回発行している機関誌を第1号(1976年10月)より200号(1994年6月)までを復刻したもので、18年間の多摩川での出来事、会の活動が記録されており、まさに自然保護運動のバイブルとも言える。

##### ● 「玉川上水と分水」新訂増補版

小坂克信著 1995年 (株)新人物往来社  
本書は1989年発行の新訂増補版で、玉川上水と

分水の歴史について、地理地層、土木工法、時代背景等を豊富なイラストを用い平易に解説している。漢字にふりがなが付いてあり小学生向け副読本として最適である。

##### ● 「たま河源地誌考」

田辺 薫著 1995年 (株)近代文藝社  
本書は著者の遺稿を出版したもので、著者が多摩川の源流について文献に基づき考察したもので、古い順に万葉集から武蔵野歴史地理まで33誌について解説。最初に水源の記述があるのは「むさし野地名考」としている。

## 第1回 助成研究ワークショップを終えて

8月3日、財団主催による第1回「助成研究ワークショップ」が行われた。今年のテーマは「地域住民による環境回復への試み」である。

当財団も昨年20周年を迎え新しい節目を歩み始めた。この間、地域環境に取り組んで研究助成も、学術研究192件、一般研究115件に及んでいる。これまでの助成活動をふりかえり、これからの方向をさぐるために、新たな試みとして「助成研究ワークショップ」を開催することとした。

会場は国際連合大学の国際会議場をえらんだ。ちなみに、今年は国連開設50周年にあたり、国連が環境問題で国際的に重要な役割を担っていることもあり、ワークショップを開催するに、ちょうどふさわしい場所と考えられたこともある。

1992年6月、ブラジルのリオで「環境と開発に関する国連環境会議」（地球サミット）が開かれ、各国が協調して、持続的発展を目指すことが定められた。わが国でもこれをうけて1993年11月に環境基本法が制定され、1994年12月には環境基本計画を閣議決定した。現在では各地方自治体で環境基本条例、環境基本計画をすすめているところが多い。このように環境問題についての国際的なひろがり地域に至るまで、急速に進んでいることがよくわかる。

今回のワークショップでもこのような地域での環境問題への関心の高まりを反映して、定員をオーバーする参加希望者があり、当日出欠を電話で確認して参加者を調整する状況となった。

ワークショップは前半と後半に分かれ、前半が各研究者の報告、後半が総合討論という形で、とくにワークショップの性格上、聴衆を含めた、全

員参加の共同作業を試みた。

報告は次のとおりであった。

「多摩川にやさしいライフスタイルの研究」

大和田順子

「多摩川に再びメダカを一多摩川水系のメダカの分布調査とメダカ放流をめざして」

磯村 康博

「水みちマップ作成の為に調査研究—野川流域の湧水と地下水の流れの関係について—」

神谷 博

「市民の手による浅川、矢川、野川の

水質合同調査と水質表現の研究」

大竹千代子

コーディネーターは芳村、コメンテーターは東京農工大学の小倉紀雄教授にお願いした。

OHPを駆使して各研究者はそれぞれ30分にわたりわかりやすく情熱をこめて報告を行った。後半の総合討論に入り、最初に報告者間での質疑応答、感想の交換があり、研究者としての立場の違いを越えた、新しい展開がみられた。

聴衆の方々からは、できるだけ多くの方の参加を図るため、質問票をあらかじめ提出いただく方法をとった。各報告者にそれぞれ3人～4人の質問があり、内容の濃い、いろいろな多方面にわたる意見の交流が見られた。

最後に小倉先生から、各報告者への丁寧なコメントがあり、全体についても示唆ある指摘があった。時間が30分以上超過したにもかかわらず、途中で帰られる方もほとんどおられず、真剣で充実した4時間のワークショップが終わった。

芳村 重徳

- ・発行日 平成7年9月1日
- ・編集兼発行 (財)とうきゅう環境浄化財団  
〒150 渋谷区渋谷1-16-14  
(渋谷地下鉄ビル内)  
TEL (03)3400-9142  
FAX (03)3400-9141  
\*印刷所 雄文社 〒336 浦和市常盤9-11-1 TEL(048)831-8125

